

# 邪術と嫉妬

——ボルネオ島カリス社会の事例から——

奥野 克巳

## Sorcery and Envy

——The Case of the Kalis of Borneo——

OKUNO, Katsumi

Obirin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 17, 2005  
桜美林大学『国際学レビュー』第17号（2005年）

## Summary

This paper examines the relationship between sorcery and envy, focusing on the Kalis of Borneo. According to Kazuyoshi SUGAWARA, envy is permitted within the action space of baboons and chimpanzees, as well as human beings. SUGAWARA argues that envy appears automatically without body expression (including speech action) away from the action space, if sorcery as a cultural device exists in human society. Based on this theoretical orientation, this paper focuses on situations in which envy automatically appears in Kalis society: a village gathering to seek out sorcerers and a ritual setting for treating a sick person suffering from poisoning (a kind of sorcery). Kalis people, however, feel envy is omnipresent in their society. The Kalis attempt to extract part of envy, by explaining misfortune with sorcery or dealing with misfortune in a ritual setting. They believe envy never transforms itself into goodwill or friendliness. Envy, therefore, should be broken into pieces so as not to generate another victim of sorcery. Such practices perpetuate sorcery as a cultural device. In this sense, sorcery and envy reflexively intensify each other. As shown in this paper, the evolutionary theory of emotion will help develop anthropological study on magic, sorcery and misfortune.

\* \* \*

## 1. はじめに

エヴァンズ=プリチャードは、アザンデ社会における不幸をめぐる実践の古典的研究において、呪術 (magic) を二分した。学んだ手段を通じて、意図的に他者に病気や死などの災厄をもたらすために行われる呪術を「邪術 (sorcery)」と呼び、生得的なものが他者に作用して、病気や死などの災厄をもたらす類の呪術を「妖術 (witchcraft)」と呼んだ [エヴァンズ=プリチャード2001]。いずれの場合にも、「嫉妬」<sup>1)</sup>が呪術の作動因となりうる。呪術が嫉妬と関係することは、これまで広く指摘されてきたが [Middleton and Winter (eds.) 1963, Middleton (ed.) 1976]、感情の問題との関わりにおいて呪術が考察されることはこれまでほとんどなかった。本稿の目的は、呪術と嫉妬、とりわけ、邪術と嫉妬の関係を考察することを通じて、新たな災因論研究<sup>2)</sup>を展開するための下準備をすることである。

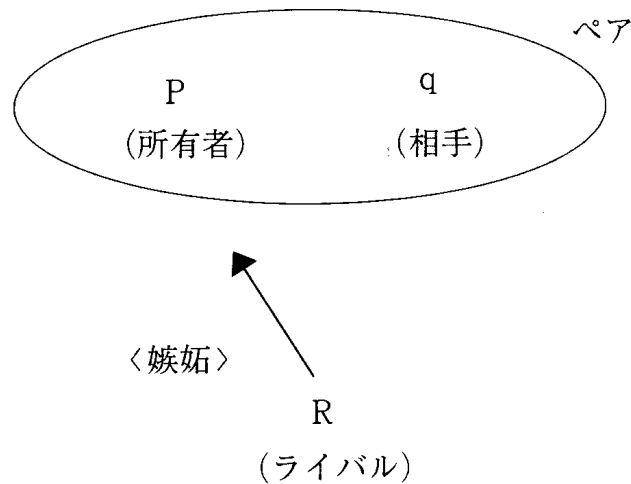
ところで、近年の霊長類学における人間性をめぐる議論は、人間の特性であるとされる知性や感情の起源が、すでにヒト以前の進化の段階の動物たちにあることを明らかにしてきた。<sup>3)</sup> その脈絡で、菅原和孝は、嫉妬が、性行動を中心として、マントヒヒとチンパンジーなどの動物にも認められることを示している [菅原2002, 2003]。さらに、菅原は、嫉妬をヒトの行動へと位置づけた上で、「邪術という文化装置の発明が、感情の進化にとって画期的な出来事であったことがわかる」 [菅原2003: 59]<sup>4)</sup>と述べて、人類においては、邪術を通じて、嫉妬がヒト以前の動物の段階とは異なった仕方で立ち現れるとした [菅原2003]。<sup>5)</sup>

これは、いったいどういうことだろうか。菅原は、以下のように、嫉妬の本来的な現れ方を指摘することから始める。

本来、嫉妬とは、三角関係によって構造化された行為空間において、P [所有者] と R [ライバル] のそれぞれが身体的な力 (もちろん言語行為を含む) を発動することと不可分にしか定義されない感情であった [菅原2003: 59]。( [ ] 内は筆者による)

P (所有者)、q (所有される相手)、R (所有者のライバル) から成る三角関係を想定してみよう (この場合、PとRは同性である。三者は、ともにヒトあるいはマントヒヒとしておく)。PとRの欲望がともにqに向かうとき、qとペアとなったPは、Rの欲望を阻害しようとする。ペアとなったP

図1 行為空間における嫉妬



と q が活動する行為空間へと参入し続ける中で、R は P を嫉妬する（図1 参照）。<sup>6)</sup>

例えば、雄と雌のペアのマントヒヒ（P と q）を一室に入れ、しきりで隔てた別室に別の雄（R）を入れる。第一の条件は、隔壁に窓があり、互いが互いを見ることができるというもの、第二の条件は、部屋はマジックミラーで隔てられていて、後者の雄だけがペアの様子を見ることができるというものである。その後、3頭のマントヒヒを一緒にすると、いずれの条件であっても、隣室にいた雄（R）はペアに働きかけようとせず、逆に、ペアから視線をそらしたり、自らの毛づくろいをしたりして、著しく抑制された態度を示すという [Kummer1973、菅原2003より引用]。菅原は、そのような表情をおびた身ぶりを嫉妬と呼ぶかぎりにおいて、隣室の雄（R）はペアの雄（P）を嫉妬している、と記述することができる結論づけている。

このように、嫉妬は、ヒト以前の段階の動物（マントヒヒ）が相互行為する場面において観察される。嫉妬とは、他者所有（P による q の所有）がつねに侵犯の可能性に開かれているところから発生する感情である [菅原2003: 57]。そして、もちろん、三角関係として構造化されたヒトの行為空間においても、嫉妬は観察される。これに続けて、菅原は、以下のように、ヒトの社会において、邪術を通じて立ち現れる嫉妬について論じている。

だが、邪術者の嫌疑をかけられた者 [R] は、目に見え耳に聞こえる行為をなんら発しなくても、その心のなかに「嫉妬」を隠しもっていると、<みんな> からきめつけられる。病、死、災厄といった問題性を契機にし



地図 インドネシア・西カリマンタン州とカリス人居住地

て、相互行為の外部に「目に見えない心」が自律的に設定されたのである〔菅原2003：59〕。〔 〕内は筆者による)

邪術が体系化されているようなヒトの社会では、嫉妬は、人と人が相互行為を行う行為空間において観察される以外に、身体表現（言語行為を含む）を伴うことなしに、邪術の嫌疑をかけられた者の心の中に存在するものとして、共同体のメンバーによって知られるようになる、というのである。逆の角度から言えば、文化装置としての邪術は、PやqやRらが集う行為空間における人びとの身体表現なしに、嫉妬という感情（の存在）を共同体へと送り込むことになる。

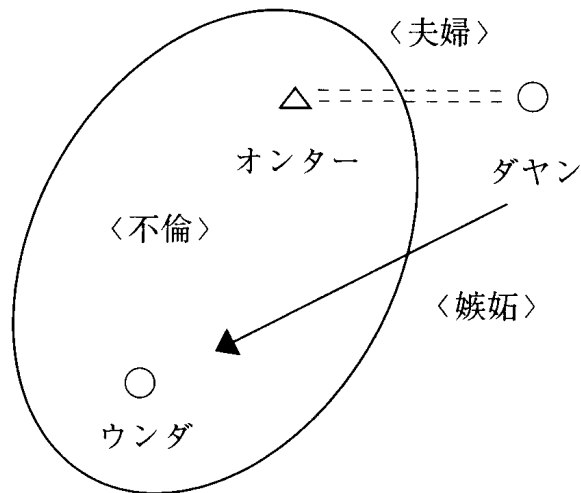
本稿では、このような邪術と嫉妬の関係の見通しを踏まえて、邪術を通じて嫉妬がどのように自律的に設定されるのかを、ボルネオ島カリス（Kalis）社会の事例の中から記述したい。カリス人は、インドネシア・西カリマンタン州（ボルネオ島）を東から西に流れる大河カプアス河の上流に注ぎ込むマンダイ川の支流カリス川の流域に住む、人口2千人弱の焼畑稲作民である（地図参照）。以下、2章では、カリス社会の行為空間において観察される嫉妬について描写した上で、3章で、カリス社会において邪術を背景として嫉妬がどのように自律的に設定されるのかを記述・考察する。

## 2. 夫を寝取られた妻の嫉妬

カリス語には、「嫉妬している」という意味を表すために用いられる二つの語がある。それらは *ngabuluang ate* と *bunci* である。前者を使う場合には、一般に、方向を示す助詞「～に対して (*mandii*)」を用いて「誰某が誰某に嫉妬している」という言い方をする。例えば、それは、「彼は君に嫉妬している (*Iatee ngabuluang atena mandii iko*)」というかたちで使われる。他方、後者は、目的を示す助詞「～を (と) (*dan*)」と一緒に使われる。「彼は君を嫉妬している (*Iatee bunci dan iko*)」という言い方になる。

さて、以下では、ダヤン (*Dayang*、以下、人名はすべて仮称) が、夫オンター (*Ontah*) とその不倫相手、未亡人のウンダ (*Unda*) の婚姻外性交渉に対して裁きを求めた慣習法会議<sup>7)</sup>の場面から立ち現れる嫉妬について検討する (図2参照)。(不倫)事件の全貌は、その会議の場において明らかにされた。論点を先取りすれば、「ダヤンがウンダに嫉妬している (*Dayang ngabuluang ate na mandii i Unda*)」ことが、ダヤン、オンター、ウンダの三角

図2 オンターをめぐる三角関係



関係的な行為空間において観察され、共同体のメンバーに知れ渡ったのである。

ウンダは、5人の子どもを育てている未亡人であり、オンター・ダヤン夫妻の隣人である。ダヤンは、夫の不倫現場を目撃し、慣習法に基づいて、夫オンターとその不倫相手ウンダを裁くために慣習法会議を開くことをクパラ・アダット (Kepala Adat)<sup>8)</sup>に求めた。以下は、その慣習法会議の最初の場面である。

ダヤン：ある日、オンターは、川に魚の網を張りました。翌朝、彼は魚の網を調べてくるといったのです。ウンダは、彼についていったのです。その後、私が後を追って行って、見ると、魚の網はすでにはずされていました。オンターとウンダの2人は、近くの小屋の中にいました。ここでは、その小屋の中の様子を述べません。皆さんは、彼らが何をしていたのかお分かりでしょう。私は、2人（オンターとウンダ）に言いました。私は、あなたたちにこんなことをされたくない。村で会議を開きます、と…オンターは、私だけの夫だと思っていました。ウンダとは姉妹のようにしてきました。でも、2人は私を欺いたのです。以前、アンティス (Antis、隣人の名前) が、2人の（不倫）関係を話してくれたのですが、私は信じませんでした。でも、今回は、私が現場を押さえたのです。ウンダがオンターの第二夫人になるのはいやです。オンターと私

は似合いの夫婦だからです。だから私は訴えるのです。

オンター：私は間違いを犯しました。そのことを、すべての親族に謝罪します。人間というのは、間違いをするものなのです…私はもう逃げ隠れしません。どうか慣習法で裁いてください。決定には従います。(ウンダと)結婚するのは、重荷です。ウンダとは口先の約束をただけです。慣習法の決定がなされたなら、私は二度とウンダと過ちを繰り返しません。

ウンダ：私は、魚の網を調べに行ったのです。偶然にもオンターに出会ったのです。そして、ダヤンがやって来ました。オンターとダヤンが口裏を合わせて、私をだまそうとしたのです。どうなろうとも私は、オンターと結婚します。私は、彼にレイプされたのだから。慣習法の決定によって支払いの額が決められても、私は支払うことができません。私は5人の子どもすべてを連れて彼のもとに行きます…私は未亡人です。オンターはどのようにして私に近づくのでしょうか。オンターとダヤンは、刀で私を殺すのではなく、慣習法で私を殺そうとしているのです。罰金を支払うことなど私にはできません。その夫婦は力を合わせているのです。そうでないのなら、どうして(怠けものの)ダヤンが魚の網を調べになど出かけたりするのでしょうか。ここで、私たちがどこで性交していたかなどいうことはできません。拒まれても、私はオンターについて行くしかないのです。

最初に、ダヤンは、オンターとウンダの不倫関係は、オンターの正式な妻を欺く行為であると非難した上で、ウンダが彼の第二夫人になることに強く異を唱えている。これに対して、夫オンターは、不倫を犯した自らの過ちを認め、今後、ウンダとの関係を清算し、慣習法が定める処罰には従う意を示した。他方、ウンダは、日頃怠慢なダヤンが魚の網を調べに行くことは不自然であるとして、その行為が、自分を陥れるためにオンターとダヤンが仕組んだ罠であったと主張した。また、彼女はオンターに性行為を強要されたのであり、こうなった以上、オンターと結婚すると述べている。<sup>9)</sup>

上のやり取りから明らかなように、オンターは、妻であるダヤンの側へと寄り添った。それはどうやら、ウンダが、オンター・ダヤン夫婦が彼女を陥れようとしていると思っており、そのため、是が非でもオンターとそいとげ



ように考えていることに、オンターが重荷を感じたからだったようである。

ここで確認できるのは、三角関係によって構造化された慣習法会議の場において、ダヤンの身ぶりと言語を通じて、彼女の嫉妬が導き出されたという点である。<sup>10)</sup> マントヒビの行為空間において、表情をおびた身ぶりによって観察されたのと同じように、ダヤンの身ぶりと言語を通じて、彼女のウンダに対する嫉妬が明らかになったのである。その後、ダヤンのウンダに対する嫉妬は、カリス社会に広く知れ渡るようになった。<sup>11)</sup>

### 3. 邪術と嫉妬の自律的設定

今しがた見たように、通常、行為空間における表情をおびた身ぶりを通じて、嫉妬は立ち現れる。それに加えて、ヒトの社会では、嫉妬は、邪術師の嫌疑をかけられた人物の特性として自律的に設定されると、菅原は述べた。本節では、この指摘に拠りながら、カリス社会の邪術を通じた嫉妬の立ち現れ方について記述考察したい。

論点を先取りすれば、カリス社会では、嫉妬は、(1) 邪術師であるとの疑いをかけられた人物の特性として、その人物が「目に見え耳に聞こえる行為をなんら発しなくても」自律的に設定される。それだけでなく、嫉妬はまた、(2) 災厄が邪術に帰責される過程で、どこかの誰かの「見えない心」として、自律的に設定される。いずれにせよ、嫉妬が相互行為の場面から離れて立ち現れるのである。以下では、3-1で(1)の場合について、3-2で(2)の場合について記述考察したい。

カリスの邪術について、ここで簡単に整理しておこう。カリス人は、日常生活において起きる病気や死などの災厄を、二つの災因論の中に説明しようとする。災厄は、精霊(=超自然的存在)に帰責される場合と、嫉妬する他者によって仕掛けられた術に帰責される場合がある。カリス人は、それらをそれぞれ「精霊の仕業(kana antu)」、「人の仕業(kana tau)」と呼ぶ。そのうち、以下で取り上げるのは、後者の「人の仕業」である。「人の仕業」は、「マレー呪術(ilmu)」と「毒薬(sakang)」という二つの技法を通じてなされると考えられている。本稿では、カリスの「人の仕業」を邪術と呼ぶことにする(図3参照)。

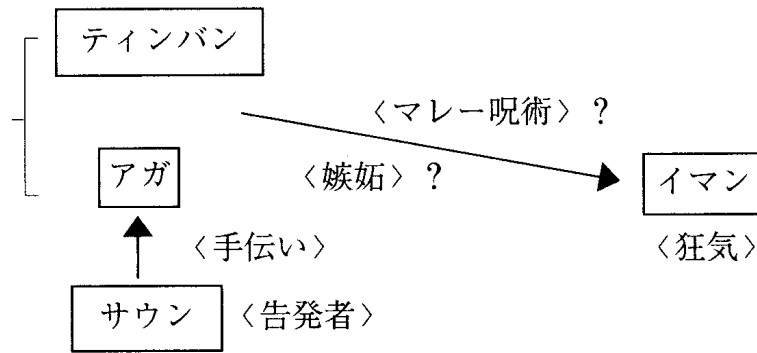
#### 3-1. 邪術師の嫉妬

病気や死などは、カリス川の下流域の村に居住するマレー・ムスリムが得

図3 カリス社会の災因論の見取り図

	災因論		病 因	対処法
邪術	精霊の仕業	…	精霊に靈魂が奪われた	シャーマニズムによる
	人の仕業	マレー呪術	マレー呪術を仕掛けられた	マレー人呪医による儀礼
	人の仕業	毒薬	毒薬を仕掛けられた	対抗薬を用いた儀礼

図4 イマンの狂気と邪術をめぐる人間関係図  
(マレー・ムスリムであるアガを除いて他の3人はカリス人)



意とするマレー呪術によって引き起こされたのだと考えられる場合がある。<sup>12)</sup> マレー呪術に起因する災厄は、マレー人の呪医によって回復させることができると考えられている。

長い間イマン (Iman) は、狂気 (rao-rao)<sup>13)</sup>に苦しんでいた。彼は、抑うつ状態に陥った末、刀や棒切れを振り回して、家族や周囲の者たちをたびたび驚かせていた。その後、イマンの隣人・サウン (Sawung) の告発によって、イマンの狂気は、ティンバン (Timbang) とアガ (Aga) の主謀で仕掛けられた、「人を狂わせ、愚か者にする (isin gila isin budu)」と呼ばれるマレー呪術によって引き起こされたことが疑われるようになった。サウンは、ティンバンとアガの2人の主謀者に脅かされて、マレー呪術を手伝わされたが、イマンの狂気がひどくなってきたので、怖くなって告発に踏み切ったと語った(図4参照)。

村長に面談されたティンバンとアガは、自分たちがイマンに対してマレー呪術を仕掛けたというのは事実ではないと主張し、サウンの告発に対して正面から争う姿勢を示した。それにより、ティンバンとアガがマレー呪術を仕

掛けたのか、そうであれば、そのことがイマンの狂気の原因となったのかという点について判定するために、慣習法会議が開かれることになった（写真1）。しかし、その慣習法会議の話し合いでは、ティンバンとアガがマレー呪術を仕掛けたのかどうかについて、真否を判定することができなかった。

そのため、熱湯の中に沈んだ石をつかみ上げることができるかどうかで事の真否を確かめる「バパック神判 (bapak)」<sup>14)</sup>が行われたのである。ところが、そこでも、ティンバンとアガの2人がマレー呪術を仕掛けた張本人であるかどうかという点について、最終的に決定することができなかった。アガは、熱湯から石をつかみ出すことができずに、マレー呪術を仕掛けたと判定されたが（写真2）、ティンバンは、熱湯から石をつかみ出すのに成功したからである（写真3）。その後、実は、ティンバンは、熱湯の中から石をつかみ上げた後に手に塩をまぶしていたことから、火傷を負っていたことが判明した。そのことは、ティンバンもまた、神判によって罰を宣告された可能性を示していた。かくして、神判の結果は、再び開かれた慣習法会議における人びとの話し合いへと持ち越されることになった。

神判の結果について人びとが話し合う会議の場に、マレー呪術を仕掛けられて狂気になったとされたイマンが、突如として、小刻みに全身を震わせながら、真っ赤な顔をして、居室の壁の裏側から乱入してきた。その場で、彼は、以下のように一気にまくし立てた。

いったいどんな決定がなされたの。いったい誰が負けたの。火傷した者がいるの。私はもう一日たりとも待てやしない。彼ら（＝ティンバンとアガ）は、熱湯に手をつけるまで一切白状しようとしなかった。塩をまぶしたのは、火傷した証拠だ。負けた証拠だ…（中略）…アガよ、かつておまえは不倫事件で裁かれたことがあったが、私が裁いたのか。この村で不倫をするように命じたのは私か。問題を起こすのではない、奥さんをもろうなら正しい方法で、と言ったのはこの私だが。それで、お前は私にこんな仕打ちをしたのだ。ティンバンよ、おまえは、私が集落長となったことを嫉妬していたことを私は知っている。火傷をしても塩をまぶしてまでつくろうとは！ 邪悪な輩は、この集落から追い出してやる！ ティンバンよ、私はこの村の新参者なのか。私はアガに、ここで不倫するように命じたのではない。ティンバンよ、私は集落長になって、給料を欲張っているのではない。集落長の仕事がどんなに大変であるとか。おまえたちは、おまえたち自身に腹が立ってこんなことをしたの



写真1 慣習法会議に集う人びと

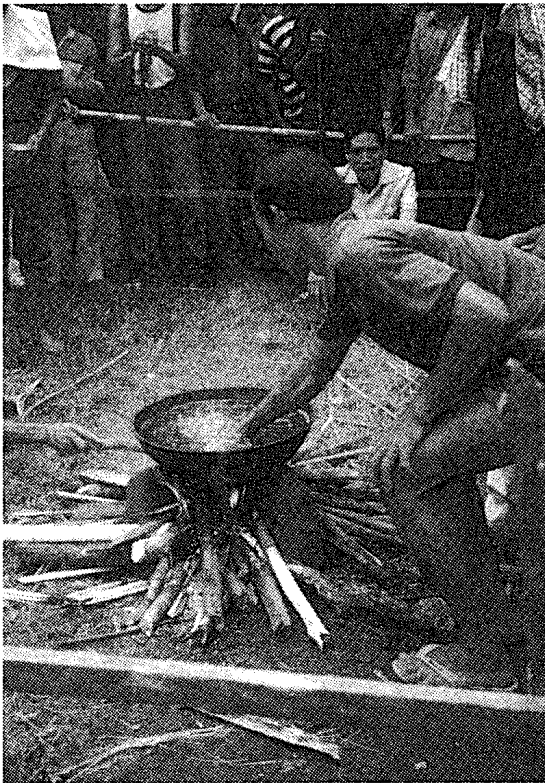


写真2 熱湯に手をつけて石を取り出そうとするアガ

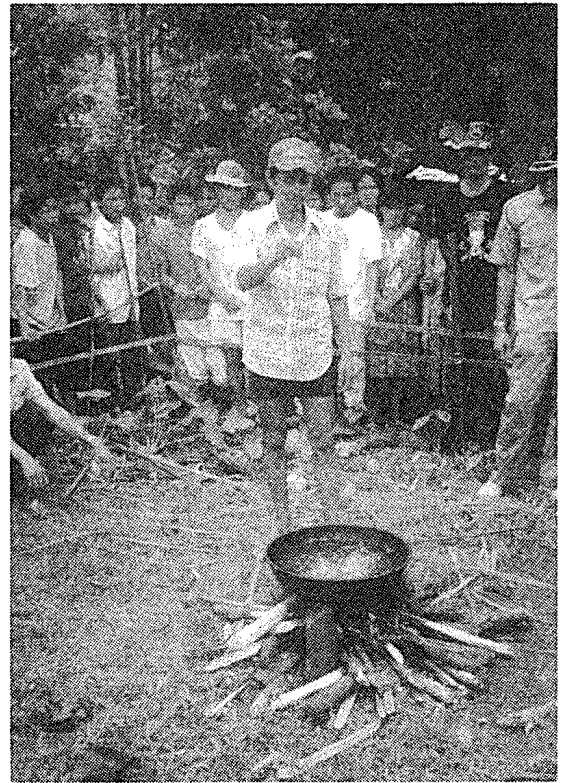


写真3 熱湯から石を取り出す前に祈りを唱えるティンパン

だ。私は、おまえたちを混乱させてなどいない！

イマンは、ティンバンとアガの仕掛けたマレー呪術が、彼に狂気を苛ませたことを確信している口ぶりで、こう述べ立てたのである。この後、形勢は一気に、ティンバンとアガがイマンに対してマレー呪術を仕掛けた張本人であると裁定することへと傾き、慣習法会議は、ついに「もしあなた方が過ちだというならば、私が過ちなのです」というティンバンの言葉を引き出すことになった。その言葉をもって、ティンバンとアガの2人がイマンに対してマレー呪術を仕掛けた邪術師であることが確定したのである。

この決定に対して、神判における神の意志について話し合う場面にいたたまれない気持ちを抱いて突如として登場したイマンによるパフォーマンスは重要である。アガは、かつて自らが起こした不倫事件でイマンに裁かれたことでイマンを妬んでいたと、イマンは読んでいた。他方、ティンバンは、イマンが集落長に選ばれたことでイマンを嫉妬していたと、イマンは感じていた。そのようにして、マレー呪術を仕掛けるに至った動機であるとイマンが考えているティンバンとアガの嫉妬の存在を、イマンはきわめて力強い語調で、その場にいる人びとに開示したのである。

イマンの語りを通じて、ティンバンとアガのイマンへの嫉妬があぶり出されることになった。ティンバンとアガが、本当にイマンに嫉妬の気持ちを抱いていたのかどうかは、ここでは問題ではない。彼ら2人が隠しもっている（とされる）イマンに対する嫉妬こそが、マレー呪術を仕掛けたことの原因であるとされ、その嫉妬を基点として、マレー呪術とイマンの狂気が線としてつながったのである。

その後、慣習法の規定に従って、邪術師として確定されたティンバンとアガは、罰金、それまでのイマンの治療代、会議の世話人代を支払うことになった。さらに、彼らは、責任をもって、今後のイマンの狂気の治療にあたらなければならないとされた。

嫉妬について述べれば、それは、誰が邪術師であるのかを裁定する慣習法会議におけるティンバン、アガとイマンの相互行為から導き出されたのではない。ティンバンとアガが、イマンを嫉妬していると述べたのではないし、身ぶりで表現したのでもない。そうではなくて、彼らが隠しもっている（とされる）嫉妬が、突如として慣習法会議の場に踊り出たイマンの必死の理屈づけによって、ティンバンとアガの語りや身ぶりなしに、自律的に設定されたのである。

### 3-2. 毒薬使いの嫉妬

カリス社会の毒薬（＝呪薬）は、市販されている風邪薬、腹痛薬などの小さな空き瓶に入れられた物質および液体である。それは、経口摂取させるか、あるいは、呪文を唱えて呪術的に影響を及ぼすことで、人を病気にしたり、死に至らしめたりする効果があると考えられている。<sup>15)</sup> 他方、そのような毒薬に対抗して処方される薬は、同じように小さな瓶の中に入れられた物質と液体で、カリス語で *sangka'* と呼ばれる。ここでは、それを「対抗薬」と呼ぶことにする。毒薬や対抗薬の瓶には、普通、薬名や使用法などを記したラベルが貼られていない。瓶の頭のところに木の繊維かビニールの紐が巻きつけられて、台所や寝室の隅の、薄暗くて人目につかない場所に吊り下げられて保管されている。

以下で検討するのは、突然喋ることができなくなったアントン（Antong）に対して行われた対抗薬を用いた儀礼の場面における人びとの語りである。1970年代初めから出稼ぎ（*manamoe*）<sup>16)</sup>に出かけていたアントンは、1995年に20年ぶりにカリス川の母村へと戻った。ある日、めまいがして気分が悪いと訴え、アントンは、船でカリス川の下流にある社会保健センターへと運ばれた。医師は、高血圧から来る症状であると診断して、自宅で安静にするように命じた上で、飲み薬を処方した。ある晩、小便のため戸外に出たが、なかなか戻らないアントンを心配した家族が見に行くと、彼が戸口にうずくまっていたという。その後、アントンは、口を利くことができなくなった。それは、家族や周囲の人びとによって、毒薬が使われた場合の典型的な症状であると考えられた。<sup>17)</sup>

翌日になっても、アントンの症状は緩和されなかった。筆者がアントンが一時滞在していた彼の妹の家に駆けつけたときには、アントンは居室の隅に座って、泣いていた。彼の妹は、兄は喋ることができなくなったのを悲しんで泣いているのだと説明してくれた。印象的なのは、アントンの義弟が、出稼ぎで成功して久しぶりに故郷へと戻った「アントンを嫉妬している人物がいるのだ（*Jien tau ngabuluang ate na mandii i Antong*）」と、何度も繰り返し語っていたことである。

カリス社会の出稼ぎは、手ぶらで母村に戻ることはない。逆に言えば、出村後何年経っていようとも、稼ぎができた段階で初めて帰村する。その意味で、アントンの20年ぶりの帰村は、出稼ぎの成功を示していた。彼は、出稼ぎ先で知り合った女性と結婚し、立派に5人の子どもを育てて、裕福とまでは言えないが、何ヶ月も何もしないで母村で過ごせるほどの貯えもできた。

アントンは、彼の人生の成功を嫉妬/羨望される可能性にさらされていたのである。

その後、アントンの妹の家族は、隣村に住むナガ (Naga) を呼んできた。効能があるいくつかの対抗薬をもっていることで知られる男性である。ナガは家の中に入ると、皆の前で、伝え聞く症状からすると、アントンは「ブフタイ (buhutai)」<sup>18)</sup>と呼ばれる強力な毒薬に打ち負かされたのではないかと考えて、そのための対抗薬を持参したと述べた。ここで見るのは、アントンに対してナガによって行われた毒薬に対処するための儀礼の一場面である。ウドゥン (Udun) とマヤン (Mayang) はともにアントンの姪であり、ブジャン (Bujang) はアントンの義弟である。

ウドゥン：おじさんは、話すことができないのですよ。どうして医者におじさんの病気が分かるのでしょうか。毒薬（によって引き起こされた病気）なら医者には治せないのですよ。

マヤン：なんてことでしょう、おじさんが喋れなくなるなんて。治してあげてよ、ナガおじさん…支払いはどれくらいなの。

ナガ：それ（＝支払い）は、いまは問題ではないです。この対抗薬が役に立つかどうかやってみるだけです。

ブジャン：「犬」に噛まれたなら（＝ブフタイにやられたのなら）、その部分が青くなるはずですよ。

ナガ：（瓶の中から液体を少量取り出して、アントンの額にこすりつけながら）私はあなた（＝アントン）を治療する。送り込んだ人物のところへと戻るのだ。その人のもとへと戻るのだ。

筆者：アントンはブフタイにやられたのですか。

ナガ：そうだと思う。

ウドゥン：やられたのは、おじさん（＝アントン）が戸外に小便に行ったときよ。

ナガ：話すことができないまま放っておくなら、そのまま死んでしまうよ。

ブジャン：「犬」のようなものにやられたんだよ。アントンは、（誰かに）嫉妬されている (dabuluang ate) なんだよ、きっと。

ナガは、アントンの額にその薬の中味の液体をこすりつけながら、明瞭には述べていないが、邪術あるいは病気を、毒薬を仕掛けた人物へと送り返し

ている。語りを通じて明らかのように、いったい誰が毒薬を仕掛けたのかについては推論されない。対抗薬を用いた儀礼では、邪術師（＝毒薬使い）の実名は、予想されたとしても、伏せられる。社会的な緊張関係を生み出さないように、公の場では匿名が原則である。

ブジャンが述べているように、アントンは、彼の成功を嫉妬（羨望）する「誰か」に毒薬を仕掛けられたと考えられている。だとすれば、嫉妬は、この場合、アントンが（不特定の誰かに）邪術を仕掛けられたのだと推論される過程を通じて、自律的に設定されたことになる。言い換えれば、文化装置としての邪術（この場合、毒薬）を通じて、不特定人物の嫉妬が共同体へと送り込まれたのである。

アントンは、その後元どおりに口が利けるまで回復した。対抗薬による儀礼が行われてから1週間ほどして、村を歩いているアントンを見かけた筆者が彼の快癒を祝う言葉をかけると、自分から「ブフタイに打ち負かされていたのだと思う（kana buhutai asaku）」と語った。このことから、アントンが口を利けなくなったことが、ブフタイによるものであり、また、そのための適切な処置をしたので回復したと考えていたことが分かる。

これとは別のケースを見てみよう。筆者の調査村の村長グントゥール（Guntur）には、あるとき、郡長代理から公金を不正に受領したという噂が広まったことがある。事の重大性を察知したグントゥールは、村人が大勢集まる機会に、事情を詳細に知っている郡長代理本人を招いて、そのような事実がなかったことを説明してもらおうと考えた。ある日、カリス川の下流にある郡長代理事務所を訪れたグントゥールは、帰村したその夜に、コップ一杯分ほどの血尿が出たという。それは、公金不正受領の件で彼のことを嫉妬している誰かが、彼に対して「ピピット・ブルナイ（pipit burnai）」<sup>19)</sup>という、即効性のある毒薬を仕掛けたからにちがいないと、グントゥールは筆者に語った。邪術（＝毒薬）を通じて、ここでもまた、嫉妬心が自律的に設定されたことを確認することができる。

#### 4. おわりに

カリス社会の婚姻外性交渉の解決をめぐる慣習法会議のやり取りを通じて明らかになったように、夫（オンター）、妻（ダヤン）、夫の不倫相手（ウンダ）の三角関係によって構造化された行為空間へと参入し続ける過程で、夫を寝取られた妻（ダヤン）は、夫の不倫相手（ウンダ）に対する嫉妬をあら



わにした。嫉妬は、行為空間の内部で、表情をおびた身ぶりを通じて観察された。

これと並行して、カリス社会では、文化装置としての邪術を通じて、身体表現なしに、嫉妬が立ち現れることが確認された。第一に、嫉妬は、マレー呪術を通じて、慣習法会議において邪術師として裁定された人物（ティンバンとアガ）の語りとは身ぶりにではなく、邪術によって狂気に至ったとされる人物（イマン）の語りの中に、邪術師として裁定された人物が隠しもっている感情として設定された。第二に、口を利けなくなった人物（アントン）が、毒薬を仕掛けられたと推論され、その病気に対処する儀礼が行われる過程を通じて、誰であるか特定できない人物が隠しもっている感情として、嫉妬は設定された。

このように、カリス社会において、邪術を通じて自律的に設定された嫉妬を、最後に再び、文化装置としての邪術との関わりにおいて捉え返してみたい。

菅原が感情の進化の観点から、邪術こそが、嫉妬を相互行為の場面から分離して自律的に設定する装置であると捉えているのに反して、ヒトの社会では、邪術があるにせよないにせよ、嫉妬は三角関係的な行為空間を離れて、いたるところに潜んでいる、うごめいていると感じられるのではないだろうか。本来的には、行為が身にまとう表情としてしか経験されえない嫉妬は、相互行為の場面から分離され、いたるところに存在すると感じられる。別の言い方をすれば、嫉妬は、ヒトの社会では、「目に見えない」他者の感情として遍在している。

そうだとすれば、カリス人は、災厄が邪術によるものではないかと推論することや、邪術によって引き起こされた病気に対処することを通じて、嫉妬が自律的に設定されるというよりも、そのようにして遍在する嫉妬の一部を、共同体へとあぶり出していることになる。そして、共同体へとあぶり出された嫉妬の一部は、そのままにしておくだけでは済まされない。なぜならば、嫉妬こそが、邪術の原因となるからである。

毒薬に対処するための儀礼で見たように、対抗薬の所有者は、何を送り返すのかについて明瞭には述べないが、当の病気あるいは邪術を、それを発信した（誰だか分からない）人物へと送り返していた。あるインフォーマントは、対抗薬は、不特定の人物の「心 (ate)」に届くように投じられると、筆者に語ったことがある。仮説として述べれば、対抗薬は、不特定の人物の嫉妬を封じるために投じられるのではないだろうか。

他方、マレー呪術に起因する病気は、マレー・ムスリムの呪医が治すことができることとされる。本稿では取り上げなかったが、マレー呪術に起因する病気の治療もまた、それを仕掛けたと疑われる者の嫉妬を封じたり、抑制したりすることに関わっていると推測できる。本稿で、マレー呪術を仕掛けた邪術師をめぐる裁判の場面で見えた処置は、邪術師を罰することよりも、共同体のもつ慣習法の力によって、邪術を仕掛けたと裁定された者たちの嫉妬をコントロールすることに重心が置かれていたように思われる。

いずれにせよ、嫉妬、とりわけ邪術へとつながる危険な嫉妬は、共同体へとあぶり出された上で、封じられ、制御されなければならないのである。日常の社会関係の網の目の中で徐々に育まれた嫉妬は、嫉妬ではない感情または好意や好感などへと容易に変貌することなどないと、カリスの人びとは考える。そのため、邪術を胚胎するような嫉妬は、儀礼を通じて、次なる邪術の犠牲者の発生を抑えるために、封じられなければならない。

このように、文化装置としての邪術は、相互行為を離れて存在すると想定されている嫉妬の一部を共同体へとあぶり出すと同時に、その嫉妬を封じようとする。そのような実践が、逆に、文化装置としての邪術を存続させている。その意味で、邪術と嫉妬は、相互に反照するかたちで、互いを強化し合っている。

このように見てくると、人びとが災厄の経験をどのように組織するのかを記述分析することを主題化してきた従来の災因論研究では、邪術（呪術）の実相が十分に解明されたことにはならない。邪術（呪術）が嫉妬を相互行為から離れたところで設定し、また、邪術（呪術）が嫉妬を重要な動機として作動するのであれば、呪術と感情の関係に照準をあてることにより、今後、災因論研究をより一層深めることができるだろう。

呪術にとって、それを発動させる感情とはいったいどのようなものだろうか。感情は、呪術をどのように作動させるのだろうか。そのような探究へと向かう際、感情の成り立ちを進化の観点から捉える諸研究が、大きなインスピレーションを与えてくれるはずである。

## 注

- 1) 嫉妬とは、個人が所有すべきもの、所有する権利のあるもの、所有して当然なものを所有しておらず、あるいはその所有が脅かされており、そして第三者が不当に所有していると思われる場合、または少なくとも所有しているのではないかと疑われる場合、個人が第三者に対して抱く感情であると本稿では理解しておきたい〔岸

田1987:202]。嫉妬は、個人が所有するものを第三者に奪われたとき、または奪い取られたのではないかと疑われるときの感情であるのに対して、羨望は、個人が欲しいものを第三者が所有しているときの感情であるとされる。個人の感情面に焦点をあてるならば、所有と非所有の区別は、さほど大きな問題ではない [岸田1987:203]。嫉妬には、妬み、嫉みなどの意もある。本稿では、これらの概念を包括的に含むものとして、嫉妬という語を用いる。

- 2) 長島は、「人間にふりかかる不幸や災いを解釈し、説明し、そしてそれに対処するための行動を指示する、個人に外在するシステム」 [長島1982:539] を災因論と呼んだ。災因論とは、人間が日常生活の中で経験する災いを因果連関の中に捉えて、それを解決しようとする試みをめぐる体系のことである。災因論研究は、人びとが災いを何に帰責するのかを捉えることで、その背景にある人びとの考え方や行動の仕方を追究する [奥野2004]。
- 3) 他者が何を感じているのかを認知して、「欺き」を行う社会的知能は、霊長類の段階において著しい発達を遂げたとされる [バーン+ホワイトウン2004]。ダンバーは、霊長類の各種の脳の新皮質の割合とグループ・サイズの相関関係に着目し、毛づくろいで社会関係を調整するのが難しくなった結果として、言語が誕生したという仮説を提起している [ダンバー 1998]。また、近年霊長類学者によって、知性や感情の起源を含む人間性をめぐる議論が盛んに行われている [西田1999、松沢・長谷川2000、西田・北村・山極2003]。
- 4) 妖術もまた嫉妬によって発動する場合があるのだとすれば、妖術もまた感情の進化にとって重要だと言える。しかし、その点に関する言及は、菅原の説明には見当たらない。
- 5) 菅原は、嫉妬を個体の「心理」に帰属させることに反撥し、社会生活の相互行為の中で感情的な言説が果たす役割に注目する。嫉妬を心理に帰属させるのではなく、社会的な相互行為の中で捉えようとした試みとしては、機能主義社会学者デイヴィスの研究がある。嫉妬とは、デイヴィスによれば、結婚などによって正当化された所有権を侵犯された人物が侵犯者に向ける感情である。デイヴィスは、嫉妬は、結婚という社会制度に対する障害を除去する機能を果たすと考えた [Davis 1936]。
- 6) 菅原に従って、本稿では、あるふるまいが行為として理解され、応答される可能性が限定された「行為空間」へと参入し続ける実存の表情をおびた身ぶりが、本来的な感情であると理解する [菅原2003:37、大庭1989]。
- 7) インドネシアの地方共同体社会には、独自のかたちで発達し、継承されてきている「口承による慣習体系」が存在する。慣習法 (adat) は、オランダ植民地統治時代から今日に至るまで、村落共同体や辺境諸社会の間接統治のためのツールとして用いられてきた。また、それは、1949年のインドネシア共和国独立以降も、土地法や村落行政基本法などの法令制定の影響を受けながら、各共同体社会に生じた諸問題や事件にあたって、行政当局から緩やかに認められてきた。カリス社会では、共同体内で起きた様々な問題の解決にあたって、慣習法会議 (si' loloan) が招集される。
- 8) クバラ・アダットは、慣習法の領域における地域ブロックごとのリーダーである。慣習法の知識に長けた人物がその任にあたるが、政府から謝金などが支払われることはない役職である。
- 9) この冒頭の意見陳述をめぐって、議論が行われた。最終的には、カリスの慣習では複数の妻をもつことは認められないとして、ダヤンの訴えに従って、オンターとダヤンの夫婦関係の維持が原則とされた。その上で、慣習法に従って、オンターに最も大きな処罰が下されることになった。威信財 (銅鑼、壺) などの財産と豚が、オ

- ンターからダヤンの親族に支払われなければならないとの裁定がなされた。また、ウンダには、オンターの95に対して75に相当する財産の支払いが命じられた。
- 10) 日常の諸場面において、行為は互いに説明できる出来事として構成されている。従って、行為者は、言語によって説明しなくても、状況や出来事についての理解や感情を行為によって示すことが可能になる [Garfinkel 1967]。
  - 11) 慣習法会議のやり取りからは、元の鞘に収まったオンターとダヤンに対するウンダの嫉妬を読み取ることができるかもしれない。しかし、この点に関しては、本稿では取り上げない。
  - 12) マレー呪術は、マレー人とカリス人相互の行き来が頻繁になされるようになった近年になって、カリス社会に導入されたものであると考えられる。
  - 13) カリス社会には、ラオラオと「マウノ (mauno)」と呼ばれる2種類の狂気がある。ラオラオとは、真性の狂気であるマウノへと至る前の段階の狂気の様態に対して与えられた名称である [奥野2004]。
  - 14) カリス人に認められている神格に対して「事の真否」の判断を委ねた上で、嫌疑のかかった人物に熱湯から石をつかみ上げるという試罪行為を行わせ、身体的な困苦に耐えられた者は無罪、耐え切れず要求された試罪をやり遂げられなかった者は有罪とするという一種の神明裁判である。バパックとは、本来「湯が沸騰する」という意。慣習法の文脈では、それは、「沸騰した湯に手を漬け、正しい言葉を述べているか否かを、神の判断に委ねる手続き」の意である。
  - 15) 毒薬が病気や死などの災厄の原因であるとされるのは、とりわけ、社会活動の主要な担い手としての成人男性が吐血したり、血尿／血便を患ったり、突然喋れなくなった場合であり、それぞれの症状に対応する特定の毒薬に起因するものであると考えられている [奥野2004]。
  - 16) カリス社会の出稼ぎは、彼らが現金収入を得る重要な機会の一つである。カリス語のマナモエとは、青年期から壮年期の男性が一定期間、母村を離れ、何らかの経済的な活動に従事することを指す [奥野2004]。
  - 17) アントンが喋れなくなったのは、3-1. で見た慣習法会議で、ティンバンとアガが邪術師として裁かれた直後のことであった。アントンは、その慣習法会議に出席しなかったものの、狂気に苛まれていたイマンを治療のために専門家に引き合わせようとしたことがあった。アントンの家族は、最初、目論見を邪魔されて、アントンを疎ましく感じたティンバンとアガが、マレー呪術を仕掛けたのではないかと推論した。しかし、その推論は、それに応じた治療行動へとつながることはなかった。
  - 18) ブフタイとは、人を死や病気に至らしめることができる強力な毒薬の一種である。その瓶の中には、所有者が人間の血を吸って生きている、超自然的な「犬」を飼っているとされる。所有者は毎晩手指を傷つけ、その血をその瓶のなかに少しずつ垂らして、その「犬」を餌付けしているとされる。それだけでは餌が足りないので、所有者は、瓶の中の犬を解放して、人間を餌食にするとされる。カリス人は、そのようなものとして想像されるブフタイを非常に怖がっている。真夜中にサーッと闇から闇に駆け抜ける犬の姿が目撃されたり、遠くで低くうなりつづける犬の声が聞こえたりするとき、人びとはブフタイの「犬」が放されたのだと言って怖がる。
  - 19) それは、瓶の底にたまった粉である。それが、呪文とともに風に乗って飛ばされることによって、犠牲者は、吐血したり、血尿・血便に悩まされたりすると考えられている。

## 引用文献

- バーン、リチャード+アンドリュウ・ホワイトウン  
2004 『マキャベリの知性と心の理論の進化論：ヒトはなぜ賢くなったか』 藤田和生・山下博志・友永雅巳監訳、ナカニシヤ出版
- Davis, K.  
1936 “Jealousy and Sexual Property”, *Social Force* 14: 395-405.
- ダンバー、ロビン  
1998 『ことばの起源：猿の毛づくろい、人のゴシップ』 松浦俊輔・服部清美訳、青土社
- エヴァンズ=プリチャード、エドワード・E  
2001 『アザンデ人の世界：妖術・託宣・呪術』 向井元子訳、みすず書房
- Garfinkel, H.  
1967 *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.
- 岸田秀  
1987 『嫉妬の時代』 飛鳥新社
- Kummer, H.  
1973 “Dominance versus possession: An experiment on Hamadryas Baboons”. In *Proceedings of Fourth International Congress of Primatology*, Vol.1: Precultural Primate Behaviour, Basel: Karger, 226-231.
- 松沢哲郎・長谷川寿一編  
2000 『心の進化：人間性の起源を求めて』 岩波書店
- Middleton, J. (ed.)  
1976 *Magic, Witchcraft, and Curing*. University of Texas Press.
- Middleton, J. and E.H.Winter (eds.)  
1963 *Witchcraft and Sorcery in East Africa*. Routledge & Kegan Paul.
- 長島信弘  
1982 「解説」『ヌアー族の宗教』エヴァンズ=プリチャード著、向井元子訳、pp.539-540、岩波書店
- 西田正規  
1999 『人間性はどこから来たか：サル学からのアプローチ』 京都大学学術出版会
- 西田正規・北村光二・山極寿一編  
2003 『人間性の起源と進化』 昭和堂
- 大庭健  
1989 『他者とは誰のことか——自己組織システムの倫理学』 勁草書房
- 奥野克巳  
2004 『「精霊の仕業」と「人の仕業」：ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処法』 春風社
- 菅原和孝  
2002 『感情の猿＝人』 弘文堂  
2003 「感情の進化論」西田正規・北村光二・山極寿一編『人間性の起源と進化』pp.31-62、昭和堂